

巻頭言

労協大学寄附講座運動、 次の一步に向けて

伊丹 謙太郎 (千葉大学特任助教/協同総研理事)

大学寄附講座の広がり

協同組合論の寄附講座が広く設けられるようになったきっかけは2012年、すなわち「国際協同組合年」であった。同年には、一橋大学、早稲田大学、駒澤大学、埼玉県立大学、神奈川大学、京都大学、同志社大学、関西大学、神戸大学等で協同組合と大学が連携した講座が開講されている。

千葉大学では、こうした先行する取組に学びながら、2年後の2014年度よりIYC記念全国協議会の寄附講座として全10学部1・2年次生対象の一般教養科目として「非営利市民事業と協同組合」を開講し、2020年度で7年目をむかえる。「協同組合に対する社会的認知を高める」という趣旨に沿って、学生に身近な存在として協同組合を知ってもらうことが講座の目的であり、毎年、購買生協やJA、共済、信金・信組などなるべく多様な分野の協同組織から外部講師をお招きしている。

労協講座の二重の役割

一方で、2018年度より開講したのが、ワーカーズコープの寄附講座「地域で仕事をおこす」である。この科目は「知っ

てもら(社会的認知)」というレベルにとどまらず、学生が地域の課題に向き合い、自らの力で新しい協同組合を設立するよう誘う、きわめて野心的な目的をもつプログラムである(コーディネーターとして協同総研の相良孝雄氏を講師に招聘している)。講座では、学生がもっているキャリア観を言語化し、見つめ直すことからスタートする。自分にとって「働く」とは何なのか?一人ひとりの学生が回答した働くことの意味や意図を皆で共有しお互いに議論し合うことで、仕事や労働に対してもっていた狭隘なイメージを脱却していく。

このように、労協講座は、一方で「協同組合」を学ぶ講座であるとともに、他方においては「働く」を学ぶ講座でもあるという二重性が特徴となっている。キャリア系科目の多くは、どうすれば目標の企業から内定を得られ、そのためにはどのような準備が必要かというハウツーにとどまるものであり、せいぜい自分にとって適性のある仕事とは何か(自己分析)を考えさせるに過ぎない。残念なことに大学側も就職率や就職先のブランド名などの数を上げることに血眼であり、周囲から煽られ

て「就活」に臨まなければならない学生が気の毒でならない。しっかりとした仕事(キャリア)観を抱くというのは、もしかしたら大人たちが考える「数字」からは外れるかもしれないが、一方で「三年で辞めていく若者たち」は減らすことができる。学生自身の生き方が周りに煽られ責め立てられて決められるという社会的病理は大学側にも大きな責任があるのだ。

対して、本講座は「働くことそれ自体がもつ内在的な価値」を学生に考えさせる授業である。「学校から社会への橋渡し」という狭いキャリア科目の役割を越えて、地域や社会、さらにはその歪みにも出会い、課題を問い、変革していく人材を養成する内容となっている。僕たち／私たちは、真剣に地域の課題と格闘しなくて本当によいのか？就活戦線とは全く違ったメッセージに度肝を抜かれる学生も多い。これには、毎年「よい仕事研究交流会」などで培われたワーカーズコープの哲学が強く反映されもいるのだろう。

望まれる次の一歩

講座にはインターンシップとして千葉県内ワーカーズの現場体験もできる枠組みになっている。望まれるのは現場での学びを大学に持ち帰った次のステップとして、学生たちが力を結集し、キャンパスや周辺地域の課題解決に乗り出す姿である。大風呂敷かもしれないが、

本学では関東有数の大学生協学生委員会や環境ISO等の学生活動が盛んであることを考えると、それらの団体とのコラボレーションで広がっていく可能性は大いに期待できる。労協講座は、将来に向けての学びを強化するとともに、目の前の解決すべき課題をもつ学生をも益するものであってほしい。

さらに、望まれる一歩がある。大学寄附講座設置は2010年代の主要ムーブメントとしてわが国の協同組合セクターの歴史にも刻まれるだろう。対して、初等中等教育での取組はまだ追いついていないと感じる。国際協同組合年当時のILO協同組合局長であったマリア・エレナ・チャベスは、協同組合の発展にもっとも大切なものを1つだけ挙げるとすれば「若者への教育」であると語っている。単に知るだけではなく、「就職や起業、地域課題解決といった人びとのあらゆる生活の局面において、協同組合を有力な選択肢のひとつに数えられるようになる」ことが発言の念頭に置かれている。協同組合教育のプログラムにおいて肝要なのは、「知る」だけではなく「体験する」ことである。「協同の実践」を体験することではじめて、人びとは「協同」に魅了される。現場を体感できるような大学講座の拡充とともに、その対象をさらに若い子どもたちへも広げていく。次の一歩は険しいが、確実に実りあるものとなるだろう。協同総研の取組に強く期待したい。